

人文学会報

83号
2020. 3. 18

事務局

〒890-0005 鹿児島市下伊敷二丁目52番1号
鹿児島県立短期大学 文学科 日文資料室

鹿児島県立短期大学 人文学会

電話(〇九九)二〇一二二二

『人文』休刊について

木戸 裕子

人文学会の論集『人文』が昨年度発行の第四二号を以て休刊することとなりました。

創刊号は一九七七年一月一日発行となつていますので、現人文学会会長としては、まことに忸怩たる思いですが、四二年の歴史にひとまず幕を下ろすことになりました。

当時の学長であった虎頭民雄先生による巻頭の「『人文』創刊によせて」には、「本学においては、すでに『鹿児島県立短期大学紀要』『商経論叢』『地域

研究年報』等の論文発表の場があるが、ここに今新たに『人文』が発行せられて、さらに論文発表の場が加えられたことは、本学における研究意欲の向上に、大いに役立つものであると信じて止まない。」とあります。このころはまだ文学科ではなく文科の国文専攻、英文専攻を名乗っていた時期ですが、門田明先生の幕末の薩摩とイギリスの関係に関する論文、久木田美枝子先生の英語学に関する論文、奥村恒哉先生、福井迪子先生、橋口晋作先生による日本文学・書誌学に関する論文と5編の論文が掲載されており、活気あふれる状況がうかがえます。表紙の「人文」の文字も、藤原行成筆の「白楽天詩巻」から採られていて、当時の先生方の学問に対する志が感じられるところですが、この表紙は最終巻の第四二号まで踏襲されてきました。創刊号の編集後記には、掲載された五

編の論文はすべて締め切りの期日前に提出されたが、資金不足などの止むを得ぬ事情で発刊が遅れたとあり、このころは会費から印刷費用がまかなわれていたらしいことがわかります(現在は県短の予算で印刷)。また、印刷・製本などの作業も若手の会員(教員?)が労を提供したともあり、当時の先生方がこの『人文』にかけた熱意がしのべれます。当時は文科と教職の教員だけではなく、教養の人文系の教員も人文学会会員で、毎号様々な分野の研究論文が発表されています。『人文』は枚数の規定等はありませんが、各教員会員の自由な研究成果発表の場であり、学会誌などに載せにくい翻刻等の資料紹介や翻訳、注釈などを掲載できるのも大きな特徴でした。私自身も、平安時代の文人大江匡衡の別集『江吏部集』の注釈を連載させていただいていま

す。

文学科の学生も学生会員という立場で投稿はできないものの、在学中は発行された『人文』を受け取ることができました。授業とは違う先生方の専門的な研究に触れる機会でもあったと思います。

しかしながら、その後多分野にわたる学会が設立され研究発表の場が増えてきたこと、人文学の分野においても査読論文が重視されるようになったことなどの事情から、近年は投稿数が減り、一篇しか申し込みがないという状況もありました。人文学会総会でも何度か『人文』の在り方について検討しましたが、研究成果の発表の場という創刊当初からの位置づけは変えないという結論に至っております。

それに加えて、近年は他大学でも改組や論文誌の電子化に伴って紙媒体での研究雑誌発行を取りやめ、本人文学会宛にも雑誌送付辞退の連絡をいただくことが増えてきました。

このような現状を踏まえ、二〇一九年秋の臨時総会において『人文』の休刊を

決定しました。

鹿児島県立短期大学の人文学分野の多くの先生方の熱意の賜物である『人文』が休刊となることは本当に寂しく諸先生に申し訳なく思います。これまでの諸先生方のご支援に改めて感謝申し上げますとともに、今後も県立短大紀要や各専門分野の学会に発表の場を移し、公開講座などの形で広く社会に成果を発信していきたいと思えます。

(文学科日本語日本文学専攻 教授)

〈卒業にあたって〉

2年間を振り返って

文学科日本語日本文学専攻

追立 奎音

私の鹿児島県立短期大学への入学が決まったのは、あと数日で3月も終わるという日のことでした。電話越しに合格を告げられ、県短に入学する意志があるかを尋ねられた時、驚きと嬉しさで胸がいっぱいになったのを今でもはっきりと覚えています。入学式当日の寒い朝、着なれないスーツとパンプスに不安を覚えながら、私は「この2年間、自分に出来る精一杯の力で頑張ろう」と決意しました。

県短の学生生活2年間の中で受けた授業には、一つ一つに様々な思い入れがあります。私は入学当初近代文学にばかり興味があり、ゼミも近代文学を選ぼうと



思っていました。古典文学や中国文学には苦手意識さえ持っていましたし、日本語学に至っては何をするのか見当もつかないなと思っていました。けれどこの2年間受けた様々な授業のおかげで、私の世界は大きく変わりました。高校まではあれ程苦手だった中国文学は読めば読むほど奥が深く面白いものでしたし、古典文学もくずし字が読めるようになる事ができました。そして日本語学は今まで「文学」にしか興味がなかった私に「日本語」そのものの面白さを教えてくれました。日本語の成り立ちや歴史を知ることがとても楽しくて、私は最初に決めていたものとは違う、日本語学のゼミに入ることに決めました。私の卒業論文のテーマは敬語についてでしたが、2年間で学んだ事をあの卒業論文で形に出来たのではないかと思えます。また、私は教職課程も履修していました。初めの頃は他の友人より授業時間が多いし授業外でやらなければならない事も多く、何度やめようと思ったか分かりません。それでも

入学式の時に決めた目標があったからこそ、最後までなんとかやり通すことが出来ました。教職をとっている上で一番嬉しかったのは、教育実習中に生徒から「授業分かりやすかったです」と言ってもらえた事だと思えます。「自分に本当にできるのか」という不安ばかりを抱えて挑んだ実習でしたが、その言葉を聞いた時、私にも人に何かを教えることが出来るのだと実感しました。あの達成感はずっと私の人生の中でこれからも背中を押してくれる力になるのだと思います。友人がたくさん出来た事も、私がこの2年間でもとても嬉しかったことの一つです。入学してから半年の間は、私自身も見知りであったり、県外から入学してきたため知り合いが全くいなかったりしたこともあり、気軽に話が出来る友人がいないという状況が続いていました。けれどふとしたきっかけで話せる人が一人、二人と増えていき、気付けば友人がたくさん出来ていました。毎日学校に行っても皆と会うのが待ち遠しくて仕方ありませんでした。私が友人達と距離を縮めるこ

とが出来たのは、学校行事の力も大きいと思います。1年次に皆で作上げた劇発表や文化祭の前夜祭、模擬店の手伝いやオープンキャンパスの手伝い、KLCでのサークル活動など、今挙げられるだけでもたくさんの方がいました。これらのことを友人達を始めとした日文専攻の皆と作り上げられたということは、私のこれからの人生においても、大きな糧になるのだと思います。

今、こうして2年間を振り返ってみた時、自分で入学式の時に立てた「この2年間、自分に出来る精一杯の力で頑張ろう」という目標は十分達成できたのではないかと思えます。本当にあつという間の、楽しくて一瞬で消えてしまう夢のような日々でした。けれど私がこの鹿児島県立短期大学で学んだことは、一つ一つが一生消えない大切な宝物です。

最後に、私を大学へと送り出してくれた父と母と妹、2年間面倒を見てくれた祖母と叔母、日文の先生方、友人たちへ精一杯の感謝の言葉で終わりたいと思います。2年間、私にたくさんのお教

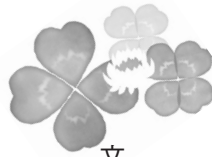
えてくれて本当にありがとうございます。



短大生活を振り返って

文学科日本語日本文学専攻

大田 乃暖綺



短大生活は、大したことを成したわけでも、大きく苦しいことがあったわけでもなく、流れるように過ぎて行った2年でした。全てがあつという間で、振り返ってみれば楽しい日々だったと思います。

私は県外から鹿児島に来て、右も左も分からず、分かれろうとする気もさしてなく、なんとなく時間に流されて過ごしていました。短大に入って痛感したのは自

分の教養の無さです。皆が一つの情報から色々なものを吸収しているところを、自分の知識の無さのせいで多く取りこぼしたように思います。それは編入試験にも影響しました。小論文で何か言いたいのに言葉が出てこない、社会問題を知らない、論の具体例が思いつかないことが多かったです。もつと外に出て、たくさん本を読んでおけば良かったと感じました。小さい頃は大人になったら自分もつと立派に生きているだろうと空想していたのに、実際は自分が中学あたりから何一つとして変わっていないのがっかりもしました。

ただ、自堕落な自分が短大でそれなりに生活できたのは、先生方や一緒に過ごした友人たちあつてのことです。高校のクラスのような、一つの専攻に約30人しかいない狭い空間が私には心地良かったです。同じ専攻を選んだというだけで、趣味や出身地もまるで違う人たちと友人になれて、約束がなくても会う機会があるというののもうそうないと思います。つくづく自分は人と環境に恵まれたと感

じます。頑張れない人間が少しでも頑張れたのは間違いない、努力する誰かを身近で見て、人に助言を貰ったおかげです。卒業論文作成においては、同じゼミの人たちと意見し合ったことが何よりの励みになりました。一緒に食事に行ったり、毎日何気ない会話で盛り上がったのはいい思い出です。

春からは鹿児島大学の法文学部に進学します。また新しいコミュニティに入ることには不安はありますが、これから社会人になる友人たちに比べればきつとどうってことないはずです。編入試験で合格を頂いたものの、何かを書いて学べば学ぶほど、自分の至らなさを痛感するの、自分が出る人間だとはとてもではありませんが言えません。練習した分だけ文章らしきもの、論文らしきものは書けますが、これからも精進していくしかないのだろうと思います。楽しかったという気持ちと同じくらい心残りもあり、2年でもつと色々勉強できたのに勿体無きことをしたかな、と思います。後悔ばかり書いてしまった気がするので弁明さ

せていただくのと、2年間の短大生活が楽しかったかと問われれば勿論楽しかったと断言できます。

おそらくこれを読む人は限られているとは思いますが、せっかく日頃の感謝を言う機会を頂いたので、ここで述べさせていただきます。試験合格のためにご指導いただいた先生方、普段の学生生活で助言を下された方々、本当にありがとうございます。ありがとうございました。特に、竹本先生にはゼミや小論文添削指導で大変お世話になりました。先生方に頂いた言葉はこれからの人生にも生きていくだろうから、一つ一つ思い出して、大事にしていきたいです。それから県短でお喋りしてくれた皆さん、私と関わってくれてありがとうございます。私と関わってくださりありがとうございました。皆さんとここで縁があったことを嬉しく思います。考え方もこれまで歩んできた軌跡も異なる方々と関わった経験はこれからの自分にとって何よりの糧になります。社会人として働く友人たち、春から別の場所で学ぶ人たち、これから短大ですごす皆さんに、多くの幸があることを願っています。

県短生活を振り返って

文学科英語英文学専攻

坂口 未歩

私は、もともと県短が第一志望だったというわけではない。しかし、県短で過ごした三年間（一年間の休学を含む）を振り返ると、県短に入学して良かったと心から思う。ここでは、県短生活の中で私が挑戦したこと、乗り越えたことを話そうと思う。

一つ目は、カナダへの語学留学だ。私は、入学前から留学したいと思っていたため、一年生のうちから本格的に計画を立て始め、二年生の春から八ヶ月間、カナダの語学学校に通った。留学してよかったと思う一番の理由は、色々な国から同じ目的でやって来た人と出会い、多くの人と友達になれたことだ。その分、私より先に帰国していく友達を見送るのは

とても辛かった。私は、八ヶ月間フランス人のルームメイトと同じ部屋で生活した。最初の頃は、文化の違いや価値観の違いを受け入れることができず、何度もぶつかり、一週間近く話をしないこともあった。しかし、お互いが思うことを正直に伝え、向き合うことができるようになった私たちは、帰国後も絶えず連絡を取り合う親友となった。滞在中は、日本人特有のアクセントに悩み、「自分はこんなもんか」と英語から逃げたくなった時期もあった。それに留学すれば誰でも英語ができるようになると多くの人は思っているが、私はそう思わなかった。毎晩パーティーに行き、翌日、学校を休むような人はたくさんいたが、私はそのような人たちに負けたくない、週末は一人で図書館やカフェで必死に勉強した。また、英語のトレーニングの一環として八ヶ月の間に一二〇本以上の映画をルームメイトと観るなど、積み重ねた努力をしたおかげで、目標のレベルのクラスで語学学校を卒業できた。出発前は不安でいっぱいだったのに、帰国時には思い出

に溢れ達成感でいっぱいだった。カナダでの経験は、私の人生のターニングポイントとなった。

二つ目は、就職活動だ。私は、入学当初から空港で働くグランドスタッフになりたいと思っていた。でも、就職活動をするにも何から始めていいか分からない。そんな中、ゼミの先生は親身に寄り添い、私の相談に乗ってくくださった。学生課の内田さんからは、三回の面接練習で入退室の仕方や会釈の角度まで細かく教えてもらった。先生方からは試験で休んだ翌週の授業に行くと、必ず「面接どうだった？」と声を掛けてくださった。就職先の大阪には何度も通ったが、最終面接では、鹿児島から私の夢を一番そばで応援してくれた両親の顔を思い出し、試験中にも関わらず感極まって涙が出た。関西出身の受験者たちに混じり、グランドスタッフになりたいという強い気持ちを前面に出して自分なりに面接試験に挑むことができた。入社後も初心と向上心を忘れず、持ち前のポジティブ志向で頑張りたい。目標は国際線ターミナル

でバリバリ働くことである。

最後に一言。一緒に卒業する英文のみんな、一年間休学していた一つ年上の私を心優しく受け入れてくれてありがとう。二年生の学校生活は正直、つまらないものになると思っていたが、かわいい妹たちのおかげでとても楽しかった。本当にありがとう。卒業してもよろしくね！

自分がやりたいことを

文学科英語英文学専攻

太良木 来南

1月中旬、卒論を提出し、短かった短大生生活が終わってしまうことを実感している。入学したころには想像できなかったくらい濃い2年間だった。この2年間で印象に残っていることは2つある。

ひとつは自分で稼いだお金でたくさん

旅行をしたことである。私は入学してすぐアルバイトを始めた。学校帰りにはほとんど毎日シフトを入れ、大好きな旅行のために貯金をしていた。特に印象に残っているのは、1年の春休みに友人と行った韓国旅行である。韓国ブームが広がっており、格安航空会社や格安ホテルの情報に手に入れやすかった。予約も簡単であったが、現地に着くまではドキドキの連続だった。同じ時期に韓国に短期留学していた友人が誕生日を迎えたため、そのお祝いでも有名なサムギョプサルのお店で食事をした。友人が現地の店員さんと韓国語で会話している姿を見て、私も英語圏に留学をして現地の人と話せるようになりたいと強く憧れを持ったのを覚えている。韓国ドラマやアイドルは好きだが、ハングルが読めなかったため、ネットで調べながら移動や買い物を楽しんだ。近場ではあったが、異国への旅行を自分たちで計画、予約し、無事に帰ってこられたことはいい経験になったと思う。

もうひとつは進路決定である。私は四

大に落ちて県短に入学した。その悔しさをバネに最初から公務員試験を受けようと決めていた。1年の春休みには滑り止めの就活を始めたが、そのとき、「自分が何をしたいのか」が不明確になった。毎日何のために公務員の過去問を解いているのか、自分が何をしたくて何社も会社概要を調べているのかわからなくなり辛い日々だった。「この仕事に興味がある」と思っても、大抵の募集対象が四大卒以上であり、そこでもまた辛い思いをした。1社から内定を頂き、公務員試験に向けての勉強を再開したが、モヤモヤした気分のままだった。もちろんそんな気持ちでは合格を勝ち取ることができず、内定をいただいた会社への入社も納得できなくなった。8月末、社会人になることを決意し、短大生活の集大成にと2週間の短期留学への計画を立て始めた。そのころオーストラリアに留学していた高校の先輩が「2週間は足りないかも」とアドバイスをくれた。私自身もせっかくならしっかり英語を習得して帰りたいと思い始めた。社会人になれ

ば長期間留学をするほどの休みを取得することはできず、短期留学さえも難しくなる。それなら四大への編入試験を受けて学生期間を伸ばさなければいけないと考え始めた。自分のやりたいことが「留学」だとうやくわかったのだ。とはいえ、もう8月。はじめから編入希望だった周りの学生はもうすでに対策を始めていた。今から対策を始めて間に合うのか、そして、会社の内定を辞退して編入試験に不合格だったらその後はどうしたらいいのか。なかなか決断できなかったが、ゼミの先生に相談し対策を始めた。この時、私に残されていた対策期間は1か月半ほどだった。はじめの1か月で4年分の過去問を毎週解き、添削してもらった。小論文だったが、なかなかうまく書けず、毎週評価が落ちて行くことに焦りを感じた。1文字も書けなくなった時には「もうだめだ」と弱気になったこともあった。しかし、先生から「残りの時間はたくさん本と新聞を読みなさい」と言われたことで、1日に3冊の本と数社分の新聞を読み続けて自信を深めていっ

た。試験当日、焦ることもなく、今まで以上に小論文を仕上げる事ができた。面接対策もゼミの先生と行っていたため、しっかりと答える事ができた。無事に合格する事ができたのは、悩んでいる時に相談に乗ってくれた友人とつきっきりで指導してくださった先生のお陰だと思う。進路決定は、自分が本当にやりたいこと、そして自分の将来について見つめ直す事ができた良いきっかけになった。

この4月からは鹿児島大学に編入するが、1年休学をして留学をする予定である。短大の2年間で得たたくさんのお出合いと、経験を大切にして、大好きな旅行、そして「自分が本当にやりたいこと」を精一杯頑張りたいと思う。



＜令和元年度卒業研究標題＞

文学科日本語日本文学専攻

氏 名	卒 業 研 究 標 題
《望月ゼミ …… 日本語学》	
池 田 幸士郎	サカナクシヨンの歌詞分析について
池 田 百 花	J-POPのヒット曲における名詞と動詞について
追 立 奎 音	新聞の皇室敬語についての研究 —海外要人の訪日場面において—
川 原 晴 香	日本における名づけ習慣の変化について —近年の明治安田生命名前ランキングを調査してわかったこと—
郷 美友亜	「新語」についての研究 —辞書に載っていない「若者言葉」を含む「新語」について—
下 江 真 子	ファッション雑誌における外来語調査 —男女別—
吉 留 理 央	好意的に変化した蔑称スラングは差別語となり得るのか？
《楊ゼミ …… 日本語学・日本語教育学》	
大 川 亜佐子	ネットニュースの見出しについての研究
管 木 楓 花	日本語歌詞における終助詞の出現傾向
永 吉 愛 結	日英オノマトベの考察 —絵本におけるオノマトベについて—
《木戸ゼミ …… 日本文学・古典》	
飯 屋 碧	狐に「妖怪」としての部分と「神聖性」としての部分があるのはなぜか
川 原 理 沙	なぜ紫の上は最高の女性となったのか 「紫のゆかり」から見る紫の上
田之上 怜 来	『狭衣物語』における式部卿の宮の姫君の形代としての要素と役割について
永 井 美 琴	左遷後の菅原道真について —左遷後、道真の心情はどのように変化していったのか—
野 口 芽 生	『百人一首』における僧の歌の撰歌理由
別 當 鈴	『落窪物語』における裁縫の役割について
松 下 明日香	『古今和歌集』秋歌における「雁」の役割について
《竹本ゼミ …… 日本文学・近代》	
大 田 乃暖綺	「夢十夜」を読む
岡 元 愛 花	太宰治『人間失格』における女性の役割について
神 川 珠 菜	湊かなえ『母性』における母と娘の母娘関係と「母性」の意味
高 橋 真 帆	江戸川乱歩「人間椅子」の恐怖について
高 吉 麗 奈	『高瀬舟』の喜助と庄兵衛の共通点を読む
中 尾 美沙子	田山花袋『蒲団』 作品によって隠された芳子の心情
藤 崎 愛 香	西尾維新『少女不十分』における主人公像と主人公の行動について
村 田 葵	『龍潭譚』における象徴とその意味
横 山 晶	近松秋江『狂乱』 「私」の語りについて
角 町 ひかる	谷崎潤一郎『春琴抄』についての研究
《土肥ゼミ …… 中国文学》	
川 口 智 子	『西遊記』の孫悟空の性格について
川 路 莉 加	『水滸伝』梁山泊集結前後の人物の行動の変化について
中 里 桃 香	白居易の風諭詩作成の背景とその特徴について
長 野 亜 紀	韓愈の思想と儒教との関係について
中 平 聖 也	白居易の一族意識 —牛李の党争及び妻との交流から
古 川 桃 子	『儒林外史』における南京について

<令和元年度卒業研究標題>

文学科英語英文学専攻

氏名	卒業研究標題
《英米文学演習》（指導教員：轟 義昭）	
池田 佳音	硫黄島の戦いを題材とした映画作品の比較研究 —『硫黄島からの手紙』と『父親たちの星条旗』について—
井手 玖巳衣	原作 <i>Me before You</i> とその映画の比較研究
伊藤 佑実	恋愛映画から見る現代社会と若者の抱える問題 —『シェイプ・オブ・ウォーター』と『her/世界でひとつの彼女』の場合—
井上 綾乃	C.ディケンズ『クリスマス・キャロル』とアダプテーション映画の比較研究 —スクールジの心情・言動の変化—
岩下 りょう	『PSYCHO-PASS サイコパス』で扱われた英文学作品の役割
梅田 綾夏	小説『トワイライト』に見られる英文学作品の役割
糸井 遥	ブラック・ムービーに見る黒人像
太良木 来南	映画『ポカホンタス』の研究 —バッドエンドな物語から読み取れるメッセージと作品のファンタジー性—
鶴田 あさひ	映像作品における動物の役割 —『ズートピア』と『バグズ・ライフ』を中心に—
塗木 妃那	映画『50回目のファーストキス』の原作とリメイク版の比較研究
堀 晴香	18世紀イギリス女性の恋愛観 —映画化されたジェイン・オースティンの作品を中心に—
《比較文化演習》（指導教員：小林 朋子）	
新垣 玲香	歌舞伎劇と「2. 5次元舞台」にみる観客像
井元 弥麗	欧米と日本のホラー映画に見る恐怖という心情
假屋 七愛	ホーム・ランドとしての音楽 —アフロ・キリスト教音楽とは何か
下敷領 葵	ヨーロッパにおけるアフリカ観の変遷 —古代ギリシャから近代キリスト教社会まで
住吉 海夢	なぜスカートは女性の衣服となったのか？ —変化する衣服の文化史
高山 千恵子	女兒向けアニメーションからみるジェンダー観の変容
徳田 優花	カナダとアメリカの比較からみる多文化社会の展望
中原 希紀	吉本ばなな『キッチン』における「家族の在り方」と「ジェンダーの在り方」
福満 千子	西洋絵画から読み解く「靈感」の源 —初期キリスト教美術からポストモダンまで
若松 ひかる	トイレの歴史を通して見る清潔という概念
《英語学演習》（指導教員：遠峯 伸一郎）	
石堂 佑実	『容疑者Xの献身』における動詞の主語の意味役割について
川野 倭歌	映画 <i>Love, Rosie</i> （『あと1センチの恋』）に見られるポライトネス
清水 あゆり	映画『プラダを着た悪魔』のセリフにおける Miranda の言語表現とそれに伴う心的距離 の変化について
末吉 桃菜	『女のいない男たち』における慣用句の英訳について
住吉 梨瑚	人を表す語の接尾辞の使い分けについて
田之頭 麗奈	映画『レ・ミゼラブル』に見る英語の呼称
丁 彩花	NCIS: <i>Naval Criminal Investigative Service</i> における英語の言い間違いに対する日本語訳に見られる工夫について
武藤 美南	中英語と現代英語の不定冠詞の比較

<令和元年度卒業研究標題>

文学科英語英文学専攻

氏名	卒業研究標題
《英語学演習》(指導教員:石井 英里子)	
岩田 真子*	Foreign Tourists' Satisfaction with Souvenir Shopping in Kagoshima City
河野 真衣*	The Advantages and Disadvantages of Using Music in Japanese Secondary EFL Classrooms
坂口 未歩	Challenges for the Cafe Staff in Communicating with Foreign Customers in English
佐野 未来*	International Posture and Attitudes toward English Learning of Japanese Secondary EFL Students
立神 沙弥華*	Foreign Tourists' Evaluation of Kagoshima as a Tourist Destination
徳田 あおい*	The Advantages and Disadvantages of Using Music in Japanese Secondary EFL Classrooms
富松 麗奈*	Travel Motivation of Kagoshima Foreign Tourists: Why Do They Visit and What Do They Want to Do?
中尾 優里*	International Posture and Attitudes toward English Learning of Japanese Secondary EFL Students
長尾 瞳*	Foreign Tourists' Evaluation of Kagoshima as a Tourist Destination
ヘイドン 花*	Travel Motivation of Kagoshima Foreign Tourists: Why Do They Visit and What Do They Want to Do?
堀田 莉名*	Foreign Tourists' Satisfaction with Souvenir Shopping in Kagoshima City
牧 優波*	Foreign Tourists' Evaluation of Kagoshima as a Tourist Destination

(*印は共同研究)

《編集後記》

今号は、ちょっと残念なニュースになってしまいました。「彙報」は次号に掲載しますが、次号からは年1回の発行になるかもしれません。

『人文学会報』は文学科ホームページ (<http://www.k-kentan.ac.jp/itr/>) に掲載する予定です。「人文」論集の方は、鹿児島県立短期大学リポジトリ (<https://k-kentan.repo.nii.ac.jp/>) で公開しています。

(望月)

